一休の〈像〉と浄土宗

—その法然評と「改宗」宣言をめぐる語り—

飯島　孝良

徳川期に伝わった一休の〈像〉では、浄土宗との関係が取り沙汰される。『都名所図会』（安永九年［一七八〇］刊）の巻一「平安城」によれば、浄土宗西山深草派総本山の誓願寺には、一休が法然（一一三三～一二一二）の「一枚起請文」（建暦二年［一二一二］正月二十三日述）を美嘆する詩句をしたためた軸があり、そこには一休が「今日より浄土宗に成申候」と付記してある、というのである。

この誓願寺に伝わる詩句とは、『狂雲集』三六二にも収録された次の句である。

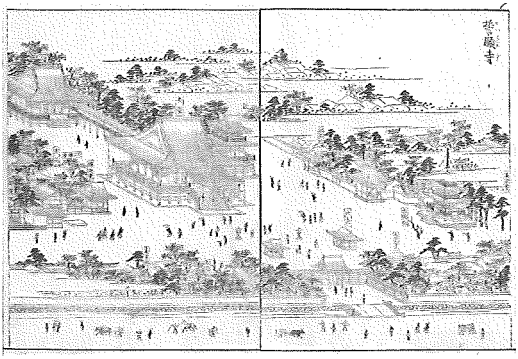
法然、活如来と伝え聞く、
蓮華上品台に安坐す。
智者に教えて尼入道の如くする、
一枚起請、最も奇なる哉。

（『狂雲集』三六二「法然上人を賛す」）

「法然は生き如来であり、上品の蓮華台に坐しておられると伝え聞く。智者の振舞いはせずに一文不知の無智なる尼入道の如くひたすら念仏すべしと教えて修めさせる「一枚起請文」は、何より優れたものであるぞ」。禅僧としては珍しいほど法然を称えたものであ

る。こうした評価の背景には、一休が同時代の禅へ批判を展開するあまり浄土宗への「改宗」宣言があり、これが徳川期まで知られるほど衝撃的だったのである。

一休は『自戒集』で印可をやたらと欲しがりに来る連中を批判し、「華叟など自分の祖師方にそもそも印可が無かったのだから、自分に印可などは無い」と宣言する。そして、寛正二年〔一四六一〕六月十六日を以て「大燈国師の頂相を本寺〔＝大徳寺〕へ返却して念仏宗となる」という趣旨の起請文を公にした（同様の趣旨は、『狂雲集』二二七「前年、辱くも大燈国師の頂相を賜るも、予、今まで衣を更えて浄土宗に入る、故に慈んで栖雲老和尚に奉還す」という句にも表明されている）。印可をむやみやたらにさかしらに求めて禅に参ずる連中よりも、「一枚起請文」の指摘するように「一文不知の無智」になりきって求道することに親近感をおぼえたとみえる。とはいえ、一休が実際に臨済宗を棄てたわけではなく、抗議の意思を示した言動といえるだろう。



『都名所図会』誓願寺図
国際日本文化研究センター蔵

一休による法然と「一枚起請文」への評価については、浄土真宗の江戸教学を推し進めた妙音院了祥（一七八八～一八四二）の『一枚起請文講義』（第三十八会）にかなり詳細な言及がみられる。了祥は、親鸞（一一七三～一二六二）の『教行信証』を理解するためにも（親鸞こそ法然の精神を体現していると証明するためにも）「一枚起請文」を踏まえねばならないという立場であり、その批判対象は、「二類各生」（専修念仏だけでなく、善行であればそれ以外でも往生し得ると

する立場）を主張する浄土宗鎮西派とされる。その了祥は、最近の学者にある誤解を批判しており、一休が単に法然や「一枚起請文」を褒め称えたのではないとして、こう続ける。

智者も愚者になりかへりて、称へると云処が、一休の気に入りて、そこをほめたのぢゃ。これが一寸きけばよひほめやうのやうなが、油断がならぬ。今私にほめさせるなら、そこはほめぬ。観念もいらぬ、学問もいらぬ、口に称ふる称名を往生の正業正因にして、一向専修の処こそ賞感すべし。さればよく称名をして正業たらしむ。【中略】一休も実に元祖（＝法然）を珍重して、浄土宗になりたら、疑なく念仏して、珠数でも繰て死ぬべきが、坐禅でくちはてた行状でもしれたこと。（『真宗全書』第五八巻、藏経書院、一九一五、三四九～三五一頁。引用に際し表記を一部調整）

つまり、一休が「二類各生」のように「他力だけでなく自力でも」という観点から「一枚起請文」を重視したものと了祥は評価しており、禅における「見性成仏」の立場から褒めたところで「そんなたてにつきた目から、一枚起請文をみてほめた言葉、とんと有難くなひ」（同前）と手厳しい。とはいえ、ひたすらに求道することを「一文不知の無智」とする立場がどのようなものか、一休の語りを例に検討されていく点は非常に興味深い。フィクションの性格が強い『一休咄』（巻之二の六）などでも一休と法然の関わりが描かれるが、しばしば語られる一休と蓮如に関する伝承【注】も含めて、これらは室町期から徳川期にかけて日本仏教史上における「禅と浄土」の位置づけがどう語られたかを示す例といえるだろう。

【注】これについては、拙著『語られ続ける一休像』（ぺりかん社、二〇二一）五二～五八頁を参照。

飯島 孝良（いいじま たかよし）
花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ぺりかん社）ほか。